

本書を手に取りページをめくって驚いた。自分が米国で研修医生活を送っていた頃、回診途中の廊下で先輩レジデントから教わりつつ手帳に書きとめた鑑別診断や治療法、カンファレンスで指導医から教えられた検査結果の解釈、忘れないための語呂合わせがそのまま目に飛び込んできたからである。今教わったら次の患者からすぐに活かせる診断・治療のポイント、逆にいうと知らなかったらアウトの臨床のコツが、すべてのページにギッシリと詰め込まれている。正統派の分厚い教科書には書かれていなくて、ベッドサイドでしか学べないような実践的な知識を、惜しみなく分け与えてくれる1冊である。この翻訳書の初版は2000年に出版されているが、本書は、大幅に内容が追加された2004年出版の原書第2版の翻訳となっている。どんなに優れた教科書でも英語で書かれていると学生・研修医には勉めにくい。今回の間髪を入れない第2版の翻訳出版は学生・研修医を指導する立場の者にも非常にありがたく、超特急で仕事を進めてくださった訳者の先生方にお礼を申し上げたい。

本書は、12のPartsと付録からなっている。Part Iは「疾患への一般的アプローチ」である。第1章「鑑別診断へのアプローチ」は、わずか3頁の記載で学生・研修医がもっとも苦手とする鑑別診断の立て方をコーチしてくれる。第2版で新たに追加された第3章「緩和ケアと疼痛管理」・第4章「院内合併症予防」は、診療科ローテーションのはざまに落ちこちそうな領域を簡潔かつ具体的に教えている。特に第4章は、病院内の安全管理の指針と

して指導医にも必見の内容である。

Part II「心疾患」からPart XII「中毒」までは、症状・症候別、疾患別に臨床的な考え方や対応法を学べる章立てとなっている。要点を絞りつつも、詳細を知っておくべき疾患や症候については大幅にページを割く、メリハリのある構成である。興味深いのは、章ごとに、定義・病態生理・症状と徴候・検査・治療などの項目の配置が異なることである。すぐに治療を開始すべきか、検査を進めて原因がわかってから治療する状況かで取り上げる順序を変えており、まさに診療の流れに沿った組み立てとなっている。第5章「心電図判読」、第16章「胸部X線写真へのアプローチ」と第49章「微生物学へのアプローチ」は、特に学生と初期研修医に読んでほしい。第7章「不整脈」や第48章「発熱へのアプローチ」からは、米国らしい合理的な分類と考え方が伝わってくる。随所に配置されている“記憶のコツ”は鑑別診断や症候を網羅する暗記法で、長いものは英語が苦手だとやや難しく感じるが、メモしておくくと便利である。“Hot Key”は文字通り鍵となる臨床項目をパンチラインにして頭に染込ませてくれる。

学生・研修医に役立つ教科書であるのはもちろんのこと、指導医にとっても知識の整理とともに教えるポイントや教え方のコツが学べる1冊である。臨床実習中の学生から指導医まで、患者診療にあたるすべての医師におすすめしたい。

(A5変判 672頁 定価6,510円(本体6,200円+税5%))
(2005年 メディカル・サイエンス・インターナショナル刊)